

多摩デポ通信 第65号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2023年11月3日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

●HP / <https://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

8月に開催した都立中央図書館の見学会を再び行います。前回行けなかった方、ぜひお申し込みください！
前回報告は2Pから詳しくあります。

夏の盛りに12人の参加で、第41回多摩デポ講座を行いました。施設見学としても、都立図書館の保存の現状を聞く会としても、参加した人に持ちかえることの多い会だったと思います。
定員の制約で行けない方がおり、都立にお願いして、再度、見学会だけを行うこと

にしました。閉架書庫と資料保全室の見学をします。

普段は入れない書庫に入り、書庫管理の様子、館内と書庫の空気浄化を担う設備も見せてもらいます。

資料保全室のような資料の保存・修復の専門部門がある都道府県立図書館は、全国で都立中央図書館だけです。案内役の眞野節雄さん（資料保全専門員、日本図書館協会資料保存委員会委員長）は、長年、図書館資料の修理・保存処理をされてきました。前回は保全室での日常業務だけでなく、東日本大震災の津波被害に

あった資料現物を見せてもらい、修復時の様子もご覧いただきました。4ページか

らの前回の感想を読んでも、貴重な機会になるはずですよ。どうぞお申し込み下さい。

第41回多摩デポ講座・見学会 Part II

「都立中央図書館の書庫 ・資料保全室の見学会」

- ・日時：11月21日(火) 午後2時～3時15分
- ・会場：東京都立中央図書館

(東京メトロ日比谷線 広尾駅下車
1番出口から徒歩8分)

- ・集合：午後1時50分 中央図書館職員入口
(正面の入口を右に回った角)

*多摩デポへ事前申し込みが必要

- ・定員 15名 会員でない方も申し込みますが、定員を越える場合は**会員優先**

・申込み先 depo_tama@yahoo.co.jp

・申込締切：11月15日(水)



第41回多摩デポ講座・

見学会報告

都立中央図書館の

資料保存の現状

3年前の2020年3月、新型コロナウイルス感染症の突然の蔓延により、直前になって中止になっていた都立中央図書館のバックヤード見学会が、ようやく8月10日に実現できました。

7月末から多摩デポ会員と多摩地域の図書館に案内をして募集しました。先方の受入条件が12人まででしたが、梓一杯の参加がありました。内訳は会員10人、非会員2人。多摩地域の現役図書館員の参加は3人でした。

改修を終えて再開館をしたばかりという都立中央図書館の地下書庫と、修復だけでなく事前の対策にも取り組む資料保全室を見学し、都立図書館の資料保存

の現状と今後の保存計画についてのお話をうかがいました。

〈私たちの関心事〉

多摩デポは今年度の総会で次のような方針を確認しています。

「多摩地域だけでリアルな共同保存までを実現することは困難な現状である。しかし一方、どの自治体も収集した資料の蓄積は続き、個々での保存はますます困難になっている。図書館の資料保存の課題や、それを共同事業として進めることの重要性は失せることではない。館長会との連携のもと、現実には東京都を巻き込んで進めていく必要がある。：：略：：共同保存図書館は、長期展望に立った図書館の広域行政の一つである。都立図書館が主導して実現すべき、あるいは都立は区市町村立と共同して

取り組むべきではないかとの認識で、館長会と連携して都立図書館に対する働きかけていく」

都立中央図書館の保存の現状や方針は、私たちの今後の活動に大いに参考になると思われたため、施設の見学だけではなく、「都立中央の改修後の閉架書庫の様子と資料保全室で行っている作業を見学し、あわせて都立図書館の資料保存全体の概要、方針、実態と今後の保存計画等を説明してほしい。特に都内区市町村の図書館と資料保存で連携を図ること、共同保存することとは検討していないのかを教えてほしい」という要望を事前に出していました。

〈現状説明と質疑〉

当日は初めに会議室に案内され、企画経営課の方から「東京都立図書館総合案

内」(令和4年3月17日発行)を参照しながら、次のような説明がありました。

(蔵書規模)

令和2年度所蔵数実績

・都立中央図書館

約217万冊

・都立多摩図書館

約53万冊

十雑誌

(うち開架冊数)

都立中央 約36万冊

都立多摩 約9万冊

十雑誌

※収蔵可能冊数

・都立中央 208万冊

・都立多摩 285万冊

都立中央は直近のレイアウト変更及び改修工事で、各階にあった事務室を書架や閲覧席に変え、収容開架冊数が25万冊から35万冊に増加できた。書庫内の資料は検索PCから出納の請求をすれば1階カウンター

で受け取れるように(Ⅱワンストップ化)なった。

(外部倉庫の廃止)

以前は外部の倉庫を契約し使っていたが、2016年に国分寺市に新・都立多摩ができたので、外部倉庫の運用はなくなつた。現在の都立図書館の書庫は、中央と多摩の二館にある書庫が全てで、都立多摩の書庫の一部は「都立図書館収蔵庫」として都立中央所管資料を運び入れている。まだしばらくは空きがある。

(30年有期保存方針)

かつて都立図書館は刊行後30年は保存するという、蔵書の「30年有期保存」を方針化した。この「都立図書館収蔵庫」ができたことで、その方針による除籍は今のところ実行されていない。

(参加者から出た質問)

・「市町村の大半の図書館では既に書庫が満杯になり、閉架書庫からの除籍も日常化している。しかし保存の期限を一律に「蔵書は〇年間の有期保存」と決めていくところは無い。市町村で置ききれないから除籍せざるを得ない場合、この資料は「他の市町村にはある」と「都立にはある」とでは判断が異なる。30年で除籍されてしまうのでは、都立をあてにできない。再考できないのか。

…この質問に明確な答えはありませんでした。

・資料費予算は、どのような状況か?の質問には、ここしばらくは3億数千円円で推移。引き続き、1点1冊収集を原則とし、「全出版点数内の収集対象の6割を収集する」という目標値には近づいていると答えられました。

・7月に都立図書館の将来

構想を検討する会議が発足したと都立図書館HPに出していた。その構成メンバーを見ると、なんと図書館関係者は1名だけだった。そんな委員構成で図書館の将来構想の検討が進められるのですか?という質問には「それは、都教育委員会が設定した会議。議論が具体的になれば図書館の現場においてくるでしょう」とのこと。

・関連して「以前にニューヨーク公共図書館のドキュメンタリー映画を見たが、幹部職員が将来構想をオープンに話し合っていた。そういうことはないのか」

…これにもコメントはありませんでした。

〈見学〉

説明の後、開架フロアを1階から4階まで案内していただき、地下の開架書庫と資料保全室を見学しまし

た。閉架書庫はよく整理されているようでした。書庫と館内の空気を循環させる空調機にセットした紫外線殺菌灯装置(図書館では大東文化大、ほかでは大田青果市場に導入されているそうです)を導入した結果、大変長い間悩まされていた湿気やカビの問題が解消したこと。確かに、古い(管理の不充分な?)閉架書庫に特有の臭いも感じられませんでした。

資料保全室とは、図書館で一般には聞きなれない部署です。資料修復だけをしているのではありません。「利用のための資料保存」をモットーに、資料修復だけではなく、書架に配架する前に自立できないソフトカバー資料を補強する等の「事前製本」もしています。図書館資料を良好な状態で長期に利用できるよう管理する部署になっています。

(詳細は、都立図書館HPの「資料保存のページ」を参照。「被災資料救済セット」の利用については館内研修(実習)もしているようです)

資料保全室が見学でき、説明が聞けたことは貴重でした。以下に掲載の参加者の感想をお読みください。今回は参加できなかった方があるので再度の見学会を予定しています。

都立中央図書館見学会に参加して

立川市中央図書館
田代 恵理子

都立中央図書館には相互貸借やレファレンスで何度もお世話になっていましたが、訪れたのはこれで二回目でした。しかも今回は研修のため裏から出入りし、閉館期間中だったために開館中の様子を見ることも叶いませんでしたので、今回

一通りご案内いただけただけです。とはとても嬉しかったです。先進的だなと感じたのは、館内のあちこちに設置してある「デジタルサイネージ」です。大人の背丈ぐらいの大きなタッチパネル画面で、操作することがまず楽しみです。館内にある資料が本棚に並んでいるかのように画面に表示され、気になる本を選ぶと、配架図を表示できたり、受取の申込みができたりと、便利そうでした。また、イベントの案内なども画面に表示することができ、図書館の様々な活動をPRできます。

4階の企画展示室では「本でたどるエジプト―古代文明から現代の暮らしまで―」を実施していました。大使館が協力していることもあって展示物が充実しており、鑑賞していて楽しく、自館の展示の参考になりました。

1階の都市・東京情報コーナーでは、ざっと立川市の棚を探したのですが、短い時間では上手く見つけることができませんでした。館内の良い場所にコーナーが設置されていることが分かりましたので、今後寄贈の機会を増やしていけると良いと思いました。

内部も見学させていただきました。都立中央図書館では長年カビ対策に頭を悩ませてきたそうで、紫外線殺菌灯、除湿器、温湿度記録計などの機器を駆使していました。資料を良い状態で長期保存するという姿勢が伝わってきました。

資料保全室でも新しく知ることがたくさんありました。和紙について、様々な厚みの種類があること、長期保存が可能と言われているが、楮(こうぞ)でできている日本の和紙と、竹が主原料の中国の竹紙とは、保存できる期間の長さや強度に違いがあることなどを学びました。

私たちに説明して下さった眞野節雄さんは、今年度をもって都立中央図書館の資料保存室を離れる予定だそうで、経験豊富な方に直接お話を伺うことができた貴重な機会でした。

眞野さんは東日本大震災の際にも被災資料の修復にあたられたそうで、被災資料の現物と、修復されたものを見せていただきました。水濡れによるページの波打ちやカビが修復により解消されていて、修復技術のすごさを感じました。「時間をかければ修復は可能」と眞野さんがおっしゃっていたことが印象に残りました。

資料保存の技術やノウハウについては、都立図書館のホームページや眞野さんの著作などから学ぶことができます。私は自館で地域

資料を担当していますが、資料の長期保存に気を払いながら資料を扱っていかうと思いました。そういった意識づけができたことが、今回の講座に参加して一番の収穫だったと感じています。



多摩デポ講座に参加して

多摩デポ会員

江森隆子

さすが多摩デポの見学会。一般向けのバックヤードツアーとは違い、書庫と資料保全室内の前にまずレクチャー。ポイントは「都立図書館の資料保存方針と保存計画」です。最近の改修工事により、収蔵スペースが少し増えたこと、都立多摩図書館にはまだまだ収蔵

力に余裕があることがわかりました。二十数年前に出された資料保存方針は「永年保存ではなく30年有期保存」となっていますが、この方針の再検討はされていないそうです。ほんとうに有期保存資料の選別をするのか気になります(むろん都内区市町村の図書館との共同保存庫などは、都立にとつては残念ながら想定外?)。

見学コースでは、まず階段を使って薄暗い地下2階の書庫へ。図書・洋書・新聞・雑誌が5層にわかれ整然と収まっています。出納職員の待機コーナーは人影なく、地下で出会った職員は三人だけでした。

地下1階にのぼり資料保全室へ。半地下の高い窓から陽光が燦々。眞野節雄さんと若い職員さんが迎えてくれました。資料保全室の職員は3名で、皆、会計年度職員。眞野さん以外のお

二人も、ともに図書館の資料保全の仕事に意欲があり、着実に技術を習得しているそうです(中央図書館発足時は収書課製本係といい、正規職員4人と係長の体制でした)。

広い部屋の奥の壁際の棚には十本を超える補修用の和紙の大きな巻紙が並び、これまた大きな製本機や裁断機が置かれ、広い仕事机には修理を持っている道具と本などが置かれています。眞野さんは入口近くから小型のコンテナを運んできました。多摩デポ講座でも教えてくれた修復道具や材料、災害時、緊急時に必要なもの一式がおさまっていました。見学者にはすぐに役立つ情報でした。

見学者用に用意してあるいろいろな劣化状態の実物を見せてもらい、資料にあった修復方法を教えてもらいました。修復に使う和紙

は、繊細で修復したことに気づかないものも多く、お見事。

最後に若い職員さんが「これだけは見てくださーい」と空調室に案内してくれました。コインランドリーの乾燥機を横につぶしたような機械が床に据え付けられていました、ガラス窓から青い太い光が水平に放たれているのが見えます。これは外から取り込んだ空気を紫外線で滅菌消毒しエアコンに送り込む装置でした。カビを防止してくれるのです。さつき書庫を歩いていた時にあの特有の臭いがしなかったのはこの機械のおかげだったのですね。機械の名前とお値段を聞き損ねたのは残念でした。

「やつと予算がとれたので」「国内の図書館ではまだ数館」ということは高額なのでしよう。でもこの機械のおかげでエアコンの電気

代は安くなったそうです。コロナ禍から流行りだした本の消毒機も紫外線を使っています。直接紫外線を照射するあの機械は本の敵。紫外線は、使い方によっては味方にもなるのですね。

蛇足ですが、見学しながらこの図書館の利用風景もちらちら見ました。人が少なくゆったりしている。一階の相談カウンター以外では職員（司書）にほとんど会えない。多くの職員がひそやかに図書館を整備しているのだろうけど、36万冊という開架の本を前にして、来館者は求めているものに出会えているのかしら……。これは、杞憂でありますように。

（元都立図書館職員）



都立多摩図書館 バックヤードツアー 参加の記

事務局 雨谷逸枝

都立中央の見学会を終え、都立多摩がどうなっているか、あらためて気になりました。たまたま10月12日に図書館主催のバックヤードツアーがあり、申し込んで書庫を見に行ってきました。

多摩デポでは、立川市から国分寺市に移転して間もない2017年1月に、第29回多摩デポ講座として、新・都立多摩図書館のバックヤードツアーを行っています。それから6年半。書庫の現状はどうなっているのでしょうか。

・閉架の集密書庫は1連の高さが10段もあります。特注の電動昇降機を使わずには高い棚に配架された資料を出したり戻したりするの

はできないからか、上の方の棚はあまり使われていないようでした。

・書庫内には、通路の片側がまだ未使用のエリアもありました。

・また、空調を含め書庫内の環境は都立中央よりはるかに良好だと思われま

す。「貴重な資料が見られる！」と見学募集のキャッチコピーにもあったので、

「都立図書館全体の貴重資料が都立多摩に収蔵されているのか？」と尋ねたのですが、都立多摩では「雑誌と青少年資料の明治・大正期のもの」を貴重資料と扱っているとの答え。山本有三文庫の木箱入り『太平御覧』を紹介されました。一般書の貴重資料は、以前と同じく都立中央で所蔵し、都立多摩には移されていないそうです。多摩での閲覧は叶いません。

・「都立中央から順次資料が

運び込まれているようだが、スペースに余裕はどのくらいあるのか？」という質問には、「当分の間、大丈夫。いずれ、ここが溢れる頃には、都立中央の建て替えも検討されるだろう」と答えられました。

・書庫内の一角に、比較的新しそうな雑誌を置いた「除籍予定資料」コーナーがあったので、「どういものが除籍対象になるのか？」と尋ねましたが、回答はもらえませんでした。

何より「都立図書館収蔵庫」に、どんな資料が運び込まれているか興味津々だったのですが、残念ながらそのエリアはツアーの対象外だったようで、案内はありませんでした。一般向けのバックヤードツアーで、通り一遍の案内に終始し、ちよつと物足りなかつたというのが正直な感想です。

へその後の調査からく

8月の見学を通じ、都立図書館の保存の現状の一端を知ることができました。

一方で、全国公共図書館協議会（この事務局は都立中央内にある）が2018・19年度に行った調査等で、全国の他の道府県が取り組み始めていることが明らかになった区市町村立図書館との共同保存について、都立図書館として何ら言及がなかったのは残念でした。

また「30年有期保存」方針は消えてないが、その方針による除籍は行われていないというのが、本当か気になりました。

2001年に都立図書館の縮小再編計画が開始され、都立多摩の蔵書14万冊が一括除籍されて20年余。この間の除籍はどうなっているのでしょうか？毎年発表されている都立図書館の『事業

概要』には、いまま除籍統計は掲載されていないので、探していくと調べる方法がありました。

日本図書館協会が毎年発行する『日本の図書館統計と名簿』です。この本の

区市町村立図書館の統計欄には、当然のように除籍数が出ていましたが、都道府県立図書館の除籍数は長らく未掲載でした（調査していなかったのでしょうか）。ところが2003年以降は、区

市町村立と同様、都道府県立の統計欄で除籍数が掲載されていたのです。二十数年を一覧表にしてみました。（2000年度の14万冊の除籍が突出していて痛々しいようですが）確かに毎年

年度	蔵書冊数(千冊)	受入冊数	除籍冊数
2000 (平成 12)	2,585	80,614	—
2001 (平成 13)	2,473	98,228	—
2002 (平成 14)	2,266	56,641	140,352
2003 (平成 15)	2,312	50,555	17,967
2004 (平成 16)	2,327	47,096	29,585
2005 (平成 17)	2,373	49,656	4,514
2006 (平成 18)	2,418	49,543	4,737
2007 (平成 19)	2,474	56,893	4,960
2008 (平成 20)	2,462	58,397	0
2009 (平成 21)	2,370	57,505	0
2010 (平成 22)	2,404	63,512	22,861
2011 (平成 23)	1,950	62,636	34,283
2012 (平成 24)	2,451	75,145	29,535
2013 (平成 25)	2,435	69,750	51,188
2014 (平成 26)	2,440	67,709	45,857
2015 (平成 27)	2,488	58,099	166
2016 (平成 28)	2,537	64,003	3,270
2017 (平成 29)	2,588	53,293	228
2018 (平成 30)	2,634	51,236	138
2019(令和元)	2,653	47,385	18,222
2020(令和2)	2,696	45,017	73
2021(令和3)	2,742	46,493	48

度「刊行年でまとめて」とか「受入冊数に押出されるように」除籍されているわけではないようです。それどころか除籍冊数がゼロの年度もあります。意外でした。

そうなると年度によつて除籍冊数が大きく違う理由、何を除籍したのか、何を根拠に行つたのかを知りたくありません。

文献を探していくと、2003年3月に刊行された『東京都立中央図書館三十年史』に、「多摩図書館の書庫を都立として一体的に運営するため、多摩図書館資料は30年有期保存という方針は廃止」という記述を見つけました。ここに書かれている都立多摩は、立川市にあつた旧・都立多摩のことです。当時は、この都立多摩がいづれ移転し拡張されるという計画は全く浮上していません。2002 | 2004年度の合計除籍冊

数は約18万冊。その後の受入冊数は毎年4 | 5万冊なので、余程継続的に除籍をしていかなければ4 | 5年で溢れだしていたのではないかと想像します。

しかし、都立図書館全体を規定し20年後の今も生きていると企画経営課の方が説明した「30年有期保存」方針は、この『東京都立中央図書館三十年史』には見当たりません。いつ決まり、どこに記録されているのでしょうか？もし新・多摩図書館で書庫問題が解決する見通しがあつたのなら、区市町村の図書館と何の協議もなく急いで除籍・払下げをする必然性があつたかについても疑問が膨らみます。いづれにせよ現在では、大きな閉架書庫を持つ新・都立多摩に「都立図書館収蔵庫」ができました。その上、書籍の出版点数が減少し、雑誌の終・廃刊が続い

ています。20年以上前に方針を立てた時とは出版状況や出版物のデジタル化の状況が全く異なっていることを考えると、1999年度に策定されたという「資料保存方針」立案時の前提とは大きな乖離が生じているはずです。

『東京都立中央図書館三十年史』で、「広域行政の都県と地域行政の区市町村との役割分担の下で、それぞれがどのように保存責任を追っていくか明確にすること」と記した課題を都立図書館はどう打開しようとしているのか、改めて話を聞く機会を持ちたいと思います。



府中市立図書館の目録の ISBN未記載データへの 推定と検証作業

——ボランティアの
方と共に

府中市立図書館との縁

府中市立図書館は、約6千㎡の中央館と比較的小規模の分館から成っています。蔵書は約150万冊あり、多摩地域の中では、施設数や蔵書規模でも書庫設備の面でも充実した市の一つです。さらに、(TAMALASで検索すると多摩地域でラスト1, 2となる図書を最も多く所蔵するなど) 古い多様なタイトルを所蔵していることも特徴です。

同館では、近年、書庫に収蔵中の蔵書の点検・整理が取り組まれ、蔵書の複本調査もされていきました。書庫の全蔵書の点検をしたいということが多摩デポに相

談されました。(配架場所が書庫)の蔵書目録のデータを提供してもらい、TAMALAS一括処理システムを使って多摩地域の各市の所蔵状況を把握する大規模な作業をし、結果をお返ししました。

ISBN未記載の目録と いう課題に向き合う

その際に私たちは、日本にISBN(国際標準図書番号)が導入されて間もない頃の蔵書には、目録にISBNが未記載の場合が多いことを再認識しました。

ISBNは、日本では1983年から書籍への付与が始まりました。開始の時から90年代初め頃までの書籍には、出版物としてはISBNが付与されても、図書館の目録作成の際にISBNを記載することがまだ一般化してなかったの

です。ISBNがないとTAMALASでの検索ができません。図書館のOPACや横断(統合)検索でもISBNで調べられませんが、これはどこの図書館も抱える課題です。

〈目録のデータにさかのぼってISBNを記載できれば、TAMALASがもっと有効に使えるのに〉と考えました。昔は紙の目録でしたが、今ではどこも目録は電子情報化されOPACから発信されています。出版界の情報も公開中です。こうした電子的な書誌情報のビッグデータとの突合から、目録未記載のISBNを推定することも理論上はできそうです。ただし日本中で経験が少なく、機械的な突合からISBNを確定できるには、推定が正しいか人力で検証(答え合わせ)をしていく必要があります。(多摩デポ

には人材があるから一緒にノウハウを作っていく)と、パートナーである(株)カーリルと研究を積み上げてきました。

たましん地域文化財団歴史資料室の蔵書の目録に、ゼロからISBNを遡及入力することもしました。昨年、『現代の図書館 Vol.2 No.2』(日本図書館協会・刊)に「専門図書館の蔵書の書誌に対するISBN大量遡及入力の実践―たましん地域文化財団歴史資料室を事例に―」として報告しています。

府中市蔵書での作業開始

こうした経過を経て、昨年府中市の目録でISBN未記載のものにISBNを推定し、結果を渡す事業を始めました。府中市が、希望する分野の優先順を示してくれるので、分野を区

切って行っています。

具体的には、(株)カーリルの手で、国立国会図書館の蔵書情報、Books.or.jpの網羅的な出版情報、収集した都内図書館群の目録情報という三つの書誌情報に、府中市のISBN未入力目録の書誌情報(書名、著者名、出版社、出版年等)を突合し、ISBNを機械的に推定したリストを作ってもらいます。リストの各タイトルについて、ISBNが正しく推定されたかを、そのISBNで呼び出せる他の図書館の目録の書誌情報と府中市の目録の書誌情報を、人力で見比べて確かめるといいます。機械的な推定の、人力による検証・判定です。(誤った推定は誤同定の場合は、なぜ誤ったかを次回の推定精度を高めるために生かしたい)。ゆくゆくは多摩地域内全図書館の目録情報に可能な

ISBNの追記ができればと考えています。

第1弾として地域資料データの提供を受け、8人の多摩デポ事務局で作業しました。最初なので、やりながら手順を決めマニュアルを作るなど手間取りましたが、6月に結果を府中市に渡せました。現在、2回目として児童書の推定・検証作業を進めています。これまでの経緯は随時『多摩デポ通信』に掲載中（ホームページで読めます）。

児童書の作業

今回は事務局員だけでなくボランティアを募り一緒に作業してもらっています。発行が1983〜93年の児童書で、同市では除籍対象ではない9類（絵本含む）は、全部で13218件。うちISBN未記載は2668件です。これを

（株）カーリルが機械的推定にかけたところ、一定の確度（スコア）でISBNが推定できたものが830件ありました。この830件を府中市の目録に付加して大丈夫かを人力による点検で確かめ中です。作業は一人の検証が終わったら別の人が再度検証するダブルチェックで行います。

募集には10人の多士済々の方が手を挙げてくれました。経歴は、多摩地域の現役公共図書館員1人。多摩地域の元公共図書館員3人。他県の現役世代1人。元都立図書館員など1人。元学校図書館司書2人。大学教授など1人。そして非会員1人（元国立国会図書館員など）です。かつて児童書の担当とか、児童書のデータ整理だからと動機に語る方が多いようです。ZOOMによる説明会や開始後の質疑の会を経て、

今は作業の真つ最中です。事務局員はこの事業を開発し作業しながら、様々な面白みも感じてきました。ボランティアの方も経験して、感じたり考えたりすることも多いだろうと思われまます。次号には府中市に結果を渡せたかの報告と共に、ぜひボランティアさんの声をお聞きし、掲載したいと考えています。

第1回多摩地域ライブラリアン講座始まりました

12人募集のところ10人の応募がありました。この方たちを受講生と確定し、講座が始まっています。10人の講師のオンデマンド講義を12月期限で視聴してもらいつつ、各自が考えて図書館に提案したい、新規事業の企画を発表するワークショップの準備中です。

□ 今号の内容 □

- ・第41回多摩デポ講座 Part II のご案内
- ・第41回講座（8月）の報告
 - ・経過、現状説明と質疑、見学、その後の調査
- ・見学会に参加して 田代恵理子
- ・多摩デポ講座に参加して 江森隆子
- ・都立多摩バックヤードツアー 雨谷逸枝
- ・府中市のISBN推定と検証作業
- ・第1回多摩地域ライブラリアン講座始まる

★会の現勢

2023年11月1日現在

●正会員

（個人） 80名

●賛助会員

（団体） 2団体

●年会費

（個人） 28名

●正会員

五千元

賛助会員 一口二千元